恵日山東福寺は五山の第四なり、大和大路一の橋の南にあり。当寺の開山は聖一国師、諱は辨園、駿州藁科の人なり。十歳にして天台宗を学び、十五歳にて三大部を終り、十八歳にて園城寺にて髪を剃、東大寺の戒壇にのぼり受戒せり。あるとき三井を出て野州長楽寺に行て栄朝に随ひて別伝の道をまなび、猶その奥旨を極ん事を欲し、人皇八十六代四条院の御宇嘉禎元年に入唐し、宋の径山寺無準を師とせり、斯て六年を経て仁治二年の秋帰朝せり。寛元元年花洛に登り、九条大相国光明峯寺殿下〔関白道家公〕より東福寺を賜て住職せり。弘安三年十月十六日七十九歳にて遷化す。偈曰、利生方便、七十九年、欲レ知二端的一、仏祖不レ伝。遷化の日当山の竹木色を白色に変じ双樹自ら枯たり。九十四代花園院の御宇正和のはじめ、謚を聖一国師と宣旨を賜る、凡国師の号は是よりはじまるとぞ。〔当寺の号は南都東大興福の両号を合せて用ゆるなり〕

山門には妙雲閣といふ横額あり、足利将軍義持公の筆なり。仏殿の本尊は釈迦仏。法堂は潮音堂と号す、額は無準の筆なり。天井の蟠龍は初め兆殿司の筆なり。此人大道和尚の弟子にして、諱は明兆、字は吉山なり。凡書る絵に奇妙ある事記に遑あらず、龍を画ば天にとび、不動をかきては火炎もえけるとかや。或とき龍を画にいまだ生身の形を見ず、願くば仏神生身の形を見せしめ給へと持念せるに、思園池の水漲上り生身の大龍目前に出現せり、其形をうつして天井に画、兆殿司滅後に画龍とび出て登天すと言伝ふ。其後狩野光頼是を画、今の蟠龍これなり。当寺の涅槃像は応永十五年六月殿司五十七歳にして画けるよし脇書にあり。本朝無双の像なれば世に名高し。其外当寺に図画多し、一生画ける絵

具は神感を得て稲荷山の北より出る、今絵具谷といふ。

方丈の額は張即之の筆、選仏場の額は径山無準の筆なり。本尊は文珠菩薩聖観音を安置す。当寺の鎮守は成就宮といふ。〔石清水、加茂、春日、稲荷、山王、五社を勧請す〕光明峰寺殿の建立なり。東司の頭は張即之の筆。十三重の石塔は比良明神の告によつて藤丞相道家公これを建る。円栢の古樹は開山国師宋国より携来る、厨の高梁も唐木にしてこれらも異国より渡る。常楽庵の額は光明峰寺の筆、謚聖一国師の勅額は持明院の宸筆なり。祖堂の中央は達磨、百丈禅師、臨済禅師の像を安置す、後壇には光明峰寺殿下の影、径山無準禅師の像あり。伝衣閣には毘沙門天、薬師、観音を安ず、是開山の昭堂なり。〔当寺建立の初より回禄の災かつてなし〕通天橋の額は普明国師の筆、橋下の渓を洗玉■といふ、此ほとりに楓多し、秋のすゑ紅錦の色をあらはしければ、洛陽の奇観となる。十月十六日は開山忌なり、俗に辨当納とて群参す。

五大堂には不動明王を安ず、正月廿八日火災除滅の札を出す、文字■是なり。

万寿寺は当山の北門三聖寺の内にあり、昔は六条坊門にあり、五山の列第五なり。